



仏教とグリーフケア	1
健康に生きていくための ICT	2
いのち教育センター講座	
愛されて育つ	3
天皇の遺族と平安貴族	4
一花山天皇の皇子たちと藤原実資一	

同朋大学 “いのちの教育” センター
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
TEL 052-411-1373
Eメール宛先 inochi@doho.ac.jp

● 同朋大学 “いのちの教育” センターだより

能登半島地震の発生につき、ご関係の皆様にご挨拶申し上げます。まさにさまざまなグリーフがある事態に今号の巻頭は呼応するかのようです。また、ついにICTという理系的テーマからの話題提供、そして子どもを愛する大人のありかたへの問いかけ、さらには大河ドラマの内容に絡む歴史の話など、今号も多面的な構成になりました。ぜひ御味読ください。来年度はセンター設立30周年の節目となり、特別企画を構想中です。

2024.3.31 NO.59

仏教とグリーフケア

吉田 暁正

私たちは、喪失を経験した時、様々な感情や反応を起こす。親しい人との死別など、大切な人や物などの喪失は、「悲しみ」や「悲嘆」という言葉で語られることが多いが、その姿はそれほど単純ではない。一人ひとりに表れる感情や反応は異なり、その姿も様々である。それが「グリーフ」である。自分に現れるどのグリーフも異常ではなく自然な反応だと知ること、そして、一人ひとりのグリーフが尊重されることによって、苦悩に沈んだままではなく、グリーフと共に生きる道が開かれる。そこに「グリーフケア」が生まれるのであろう。

仏教は、苦の原因として生老病死を課題としてきた。人として生まれた故に、老病死を苦として生きる。そこには人間の根本的な喪失による苦悩がある。その課題は、『大般涅槃経』において釈尊の入滅に悲嘆を増大させていく阿難の姿を通して確認される。

釈尊は、最後の旅において、自身の老病死の事実を示しながら、仏弟子たちに「もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行

を完成なさい」と繰り返し伝えられた。しかし阿難は、釈尊のそばでその教えを何度も聞いていながら、釈尊の入滅という現実を前に、「諸行無常」と説かれても頷くことができず、悲嘆を深めていった。

このように悲嘆に揺れ動く阿難に、釈尊はその思いを受けとめつつ、丁寧に法を繰り返し説かれ、阿難自身が悲嘆を抱えながら歩み続けていける道を開いた。その釈尊と阿難の間に生まれているのが「グリーフケア」という姿だと言えるだろう。

その意味では、すでに仏教はそのはたらきを大事に伝えてきたと言えるが、社会の様々な分野でグリーフケアの取り組みがなされているということは、それだけ人間のグリーフの課題が多様化しているということであろう。寺や仏事に対して社会から求められている声がある。社会と共同しながら、寺のあり方を考えていくことも大切ではないだろうか。

(同朋大学仏教文化研究所 客員所員)

健康に生きていくための ICT

石川 洋

モノのインターネット (IoT)、ビッグデータ、人工知能 (AI) といった情報通信技術 (ICT) は様々な分野で活用されており、福祉・介護・医療分野も例外ではない。ICTの福祉・介護・医療分野での利活用は大学や企業で研究、実践があり、情報処理学会では2015年に『ウェルネスのためのICT』、電子情報通信学会では2016年に『ICTで強くなる・健康になる』という事例特集がある。本講座では、前者から「生活習慣改善の継続支援技術」(個人のヘルスケアデータをネットワークに接続した機器を通して収集、そのデータ分析による生活習慣の改善支援サービスの提供)、「ICTを用いた運動・身体活動の測定方法と健康増進への活用」(種々のセンサを用いて運動・身体活動を測定、データ分析して健康管理を支援)、「認知症予防に役立つICT」(認知症予防の種類 (1次予防:ヘルスケアデータのモニタリング、2次予防:見守りセンサ、3次予防:ロボットセラピーなど) に応じたICT利活用方法の提案)、

「デジタル・ビューティー」(心の領域に関係する美容の分野で、容姿や肌を美しく保つためのシミュレータ、計測技術、ビッグデータを用いた予測手法)などを、後者からは「ICT技術を使った健康増進」(オンラインフィットネスクラブ実現のための利活用)の事例を紹介した。

本学では2022、2023年度に介護福祉、高齢者福祉にかかわるリカレント教育を実施し、データサイエンス、AI、IoT、DX (ビッグデータとAI等を活用した業務プロセス改善)の基本事項と、それらの介護・福祉の現場での活用事例を教材として提供しており、その内容の一部を紹介した。

また発表者自身の事例として、IoT (スマートフォンに内蔵されているセンサ)を使用したアプリを利用することで、容易にウォーキングデータが収集でき、そのデータを分析することで運動不足解消の一助になることを紹介した。

(社会福祉学部 教授)

愛されて育つ

神谷 良恵

現在、保育所等保育施設（以下保育施設）における「不適切保育」が社会的な問題として大きく取り上げられています。子どもが「愛されて育つ」ためには、子どもを「愛する大人」の存在が欠かせません。

乳幼児を預かる保育施設は、待機児童解消のために増え続け、今や1－2歳になった子どもの半数は保育施設で過ごす時代です。親または特定の大人にくっつくことで安心と安定を得ているこの頃の子どもにとって、見知らぬ大勢の人たちの中で一日の大半を過ごすことは過酷です。

そこで、0－2歳児クラスにおいては、どの子にも「特定の大人」の存在と家庭的でくつろぎのあるような空間の中でたっぷり遊べる環境を保障する保育方法が注目されています。この方法は「担当制・流れる日課」または「子どもを大切にする保育」として広がりつつあります。しかし、一般的には「おやつの時間」「片づけの時間」「排泄の時間」「寝る時間」など「時間」の区切りで複数の保育者の

指示に従って動く「一斉保育」が多く、赤ちゃんでも集団や時間に合わせて生活することが求められがちです。

国連・子どもの権利委員会(2016年)は、「赤ちゃんおよび乳児は他者に全面的に依存しているが、ケア、指示および指導を受け取るだけの受け身の存在ではない。親その他の養育者に対し、自分の生存、成長およびウェルビーイングのために必要な保護、養育および理解を求める、積極的な社会的行為主体なのである」と述べており、どんなに小さくとも子どもは主体として幸せに生きることを望み、大人にその保護と理解を求めていることが分かります。

日本でも現行の「児童福祉法」や「子ども基本法」で、子どもが主体として「愛され、保護される」理念が示されています。大人の都合ではなく、主体としての子どもに目を向け、子どもの発する声に耳を傾けることで「不適切な保育」は防げます。「愛しみ育む」人間的な営みを見直す時と感じています。

(社会福祉学部 専任講師)

天皇の遺族と平安貴族 —花山天皇の皇子たちと藤原実資—

手嶋 大侑

2024年の大河ドラマ「光る君へ」の舞台である平安中期。この時代を生きる人々にとって、“人と人のつながり”は大切なものであり、それは、天皇にとっても、貴族にとっても、そしてその遺族たちにとっても同じでした。この点を、花山天皇と藤原実資を題材に見ていきましょう。

花山天皇（諱は師貞^{もろさだ}）は、冷泉天皇の皇子として生まれ、984年8月に即位するも、藤原兼家^{かねいえ}らの謀略により、986年6月に退位した天皇です。藤原実資^{さねより}は、摂政・関白を務めた祖父藤原実頼の養子として小野宮流を継承し、右大臣まで昇った貴族になります。

さて、実資は、花山の在位中は蔵人頭として仕えましたが、退位後の花山（以下、花山院）と実資の関係については密接か疎遠かで見解が分かれていました。しかし、近年、実資が別当^{べっとう}として花山院に仕えていたことが確定し、花山院と実資の関係は良好だったことが明らかになりました（拙稿「花山院と藤原実資」『民衆史研究』

104、2023年）。

実資の日記『小右記^{しょうゆうき}』を見ると、花山院が実資との関係を大切にし、彼を頼りにしていた様子が窺えますが、より興味深い点は、花山院の崩御（1011年2月9日）後も、『小右記』に花山院の皇子たちに関する記事が散見されることです。たとえば実資は花山院皇子の昭登親王^{あきなり}と清仁親王^{きよひと}が四品に叙された際、慶賀の書状を彼らの母に送り（1011年9月10日条）、また、花山院皇子の深観の灌頂料として七条袈裟2領を提供しています（1025年8月4日条）。

このように、実資は花山院崩御後も遺された皇子たちを気にかけて面倒を見ていました。こうした実資の行動は花山院との良好な関係あつてのことと考えられます。平安時代において、生前の人間関係は、片方の死後もその遺族たちの生活を支える大切なものだったと言えるでしょう。

（文学部 専任講師）

所 員

- センター主幹：安藤 弥（文学部 教授）
所 員：北島 信子（社会福祉学部 教授）
所 員：箕浦 尚美（文学部 准教授）
所 員：岩瀬真寿美（社会福祉学部 准教授）
所 員：市野 智行（文学部 准教授）

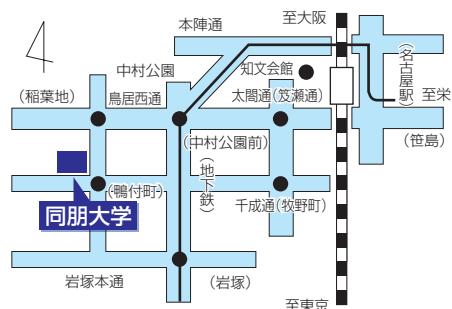
お問い合わせ先

同朋大学 “いのちの教育” センター

〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1

☎ 052-411-1373

同朋大学 周辺地図



交通 市バス／栄又は笹島より②系統稲西車庫行、鴨付町下車
地下鉄／中村公園より⑩系統稲西車庫行、鴨付町下車